

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：28002

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2017

課題番号：16K20832

研究課題名(和文) 組織的コミュニティを活かした生きがい就労による男性高齢者の介護予防

研究課題名(英文) Care prevention for elderly men through fulfilling work that takes advantage of organized communities

研究代表者

山口 初代 (YAMAGUCHI, Hatsuyo)

沖縄県立看護大学・看護学部・助教

研究者番号：70647007

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：研究目的は、都市部の組織的コミュニティにおいて、当事者性による男性高齢者の生活課題を導き、その取り組み(生きがい就労)の特徴から、介護予防活動の方向性を探ることであった。当事者性による男性高齢者の生活課題は、専門性が捉えられないものを含み、暮らしに根ざし多様であった。その取り組みは、自らの老いの暮らしに役立てる生きがい就労であった。そのため、介護予防活動の方向性は、当事者性による生活課題を共有し、専門職と協働で取り組むことが示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to elucidate the future directions of care prevention activities for elderly men in organized communities in a metropolitan area by analyzing their subjective life challenges and their efforts to engage those challenges, with a focus on fulfilling work. Elderly men had various subjective life challenges, including basic ones associated with no specialized skills. One effort they made was to engage in fulfilling work that was suitable and beneficial to their own life in old age. Therefore, important future directions of care prevention activities are for elderly men to share their subjective life challenges and to address such challenges in cooperation with professionals.

研究分野：老年看護学

キーワード：介護予防 組織的コミュニティ 男性高齢者 生きがい就労

1. 研究開始当初の背景

コミュニティには、居住地における地縁的コミュニティと、企業・団体等、目的を共有する組織的コミュニティがある。地域包括ケアシステムは、地縁的コミュニティの特性に応じて人々が希望する地域で、生涯にわたり自分らしく生活し続けられるよう構築されることが目指され、その構成要素のひとつとして介護予防が位置づけられている(地域包括ケア研究会,2013)。介護予防は、そのほとんどが厚生労働省の示す専門職主導によるサービス提供であり、その参加状況は目標値を大きく下回っている。参加者は女性高齢者が多く、男性高齢者の参加は、介護予防事業全体の2割未満であることが報告され(厚生労働省,2015)、男性高齢者の介護予防の取り組みは、従来の延長線で検討するには課題があり、性差や性役割に配慮する必要がある。

男性高齢者は、退職を契機に、組織活動や生産活動を活かすことを求められてきた社会システムから離脱し、地縁的コミュニティに参加することになるが、地域のネットワークに馴染みにくく、孤立化しやすいと報告されている(平井ら,2005;大久保,2005)。そして、男性高齢者を介護予防事業への参加につなげる取り組みとして、性差に配慮したプログラム開発(鳩野ら,1999)、介護予防は就労を含めた広い概念であるとし、就労は介護予防に効果があることが報告されている(米澤,2012;石橋ら,2013)。

就労には、現役時代における生計維持優先の就労(生計就労)と、生きがい優先の就労(生きがい就労)があり、超高齢社会を迎え、高齢者には生きがい就労を推進している(秋山・前田,2013)。さらによれば、「生きがい就労とは、現役時代の働き方とは一線を画し、“働きたいときに無理なく楽しく働ける”、“現役時代に培ってきた能力・経験を活かせる”、“高齢者の就労が地域の課題解決の貢献につながる”をコンセプトとしながら、セカ

ンドライフの選択肢としてより多くの人が長く参加でき、高齢者だけでなく地域社会全体にとっても効果的な働き方と称する」と述べている(2011)。そして、地域包括ケアシステム構築の先行事例である「柏モデル」では、都市部のベッドタウンの団地である地縁的コミュニティにおいて、定年退職後の高齢者が地域デビューし、住民、自治体、企業・団体、大学との協働で、農、食、保育、生活支援・福祉の分野における生きがい就労に取り組んでいる(2013)。

ところで、都市部の特徴は、定年退職のある第二次・第三次産業が大部分を占めること、交通の利便性に伴う生活圏域が拡大していることが挙げられる。都市部の男性高齢者は、定年退職まで就労を目的とした組織的コミュニティで多くの時間を過ごし、居住地のある地縁的コミュニティでの活動は乏しい。しかし、定年退職を契機として、暮らしが組織的コミュニティから地縁的コミュニティに移行せざるを得ない。そのため、介護予防も、地縁的コミュニティで組み立てられ、その活動への参加を男性高齢者に促しているが成果が得られていない。

従って、都市部の男性高齢者が培ってきた能力・経験を新たな組織的コミュニティでの生きがい就労に活かし介護予防につなげるよう看護職者として支援することは必要であると考えます。

私は、A小離島での保健師の実践経験がある。高齢者の活動の場づくりとして、当事者性を活かし、商品を生産して販売する活動を企画し実施した。その結果を振り返り、これらの生きがい就労のコンセプトに合致していることを体験した。

研究では、性役割に着目し、配偶者の介護における男性介護者の役割取得のプロセスや小離島における要支援・要介護高齢母親のセルフケアと息子とのサポートの授受に取り組んできた。就労との関係では、B小離島

の男性高齢者が民泊事業で修学旅行生に漁業や農業を体験させ、生きがい就労につながっていることを明らかにしてきた(科研番号26861991)。B小離島の男性高齢者は、農業や漁業など第一産業を主とし、暮らしの地縁的コミュニティと就労の組織的コミュニティが重なり合い、これまでの暮らしの延長に生きがい就労があり、介護予防につながっていた。

ところが、「A研究会」で出会った都市部の男性高齢者は、定年退職によって就労の組織的コミュニティから強制的に下ろされ、待ちわびた時間と暇を地縁的コミュニティで持て余し培ってきた能力・経験が十分に活かされていないことを実感した。

そこで、本研究では、都市部の男性高齢者においては、参加型アクションリサーチにより介護予防の視点で組織的コミュニティにおける生きがい就労の事例を提示する必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、都市部の男性高齢者が現役時代に培ってきた能力・経験を新たな組織的コミュニティでの生きがい就労をとおり、介護予防につなげることである。

先行事例の「柏モデル」は、地縁的コミュニティにおける生きがい就労である。男性高齢者の介護予防の視点で組織的コミュニティにおける生きがい就労の事例を参加型アクションリサーチで取り組む。そのために、都市部の組織的コミュニティにおいて、高齢者から学ぶことが高齢者ケアの原点であるという立場から、当事者性(高齢者の生活課題を自分ごととして捉え、その課題のために考えること)による高齢者の生活課題を導き、生活課題への取り組みの特徴から、介護予防活動の方向性を探ることである。

なお、今回は生きがい就労を、菊野(2003)の労働概念の定義を参考に、生産性に関わらず、思考や感情も含めた活動として捉えた。

3. 研究の方法

1) 組織的コミュニティの概要

豊かな老いと地域づくりに貢献するために、年齢・性別・資格を問わず、毎月定例でA研究会を開催している。A研究会とは、平成26年より、当事者との協働で、“沖縄の高齢者が培ってきた歴史・文化を尊重し、その知恵と力を礎に、高齢者、家族、当事者団体、専門職、高齢者関連組織がネットワークをつくり、互いの強みを活かした協働・連携により、高齢者ケアを発見・創造・発展させ、豊かな老いと地域づくりに貢献すること”を目的とした団体である。会員は200名でうち男性高齢者は約2割、代表者は、本学の老年保健看護教授で、私は事務局である。

2) データ収集

参加型アクションリサーチである。A研究会時に参加した20~80代の県民・保健医療福祉や衣食住の専門職・行政職の28名(そのうち、男性高齢者は3名)について、1グループ4~7名の5グループに分け、グループインタビューを90分実施した。内容は、「私(当事者性)が医療や介護の場面で体験した困りごと・希望すること」であり、そのうち男性高齢者が捉えた生活課題を抽出した。生活課題について、当事者との協働により取り組み課題と目標・計画を策定・実施し、当事者による評価を行った。

3) データ分析

当事者性による高齢者の生活課題の特徴は何かという視点で質的帰納的に分析した。文中、センテンスを「」、サブカテゴリーを、カテゴリーを《》で表示した。

4) 倫理的配慮

研究趣旨を説明し、個人が特定される表現はしない、研究協力の有無にかかわらずA研究会の参加にはまったく影響がない等、口頭で説明し同意を得た。

4. 研究成果

1) 当事者性による高齢者の生活課題

当事者性による高齢者の生活課題は 96 のセンテンスがあり、内容の類似したものを集め、41 のサブカテゴリー、11 のカテゴリーを抽出した。

そのうち男性高齢者の生活課題は 18 のセンテンスがあり、内容の類似したものを集め、11 のサブカテゴリーが抽出され、《日常生活の維持》、《老いの自覚と備え》、《人生の締めくり方の準備》、《よろず相談による適切な相談先の紹介》、《尊厳を支えるケアの開発》、《安心して暮らせる地域づくり》の 6 のカテゴリーを抽出した。専門性によって把握された生活課題だけでなく、当事者性により把握されたものがあった。

(1) 《日常生活の維持》

「食事作りに困り料理学校に通ったが、味噌汁など簡単な料理ではなく複雑で役に立たなかった。プロの料理ではなく簡単にできる料理方法を知りたい」という手軽に栄養管理もできる料理の工夫であった。また、「妻が先立ち、一人暮らし。これまで全ての家事を妻に任せていたため妻の亡き後、炊事、洗濯、買い物など全ての生活面でどうしてよいのか困った。」「妻が足に痛みがあり、買い物ができないので、私(夫)が行っている。食材や日用品の買い物には困らないが、針や糸、ゴムひもなど特殊用品の購入場所がわからずに困った。また、裁縫ができないので縫いものに困った。」という一時的や特殊な家事代行の必要性などであった。そして、「一人暮らしであり、デイサービスやパソコン教室を毎週通っているが、閉じこもらず外出の機会を多くつくるために新聞の告知欄をみて、やることを探し、日々の用事をつくるようにしている。」という自己努力で生活リズムを整えるであった。

(2) 《老いの自覚と備え》

「トイレが近かったり膀胱の筋肉が弱っ

ていることから、トイレを我慢すると漏らすことがある。漏らすとおいが外に漏れ他人に迷惑をかけるので、自分で下半身を鍛えるようにしているが厄介である。」という足腰を鍛える運動方法の普及などであった。

(3) 《人生の締めくり方の準備》

「老夫婦二人暮らしで、妻とは『認知症になったら施設に』『葬式は身内だけで』など話ができる。子ども達には迷惑をかけたくないで、息子や孫に介護も葬式も委ねようと思っている。しかし、私の意思をくみ取って決めてもらうことを期待しているが、家族が集まる正月などのイベント時にはこのような話はしづらい。」という介護や看取り・葬儀の意向の異世代家族との共有であった。また、「老夫婦で年金暮らしをしており、子どもがいない。永代供養の手続きを済ませ、有人の僧侶や葬儀社に『万が一のときは頼むぞ』とお願いしているが、私(夫)が先立つ場合には、残された妻が葬儀の手配をできるのか不安がある。妻が先立つ場合には、私(夫)が葬儀を手配するが、残された私の死後、葬儀や供養をしてくれる親族がいない。」という老夫婦の看取り・葬儀・供養の準備であった。

(4) 《よろず相談による適切な相談先の紹介》

「妻はがんの診断を受けているが、病院が嫌いで通院していない。何度家族が説得しても応じてくれない。」という適切な相談窓口の情報であった。

(5) 《尊厳を支えるケアの開発》

「弟の排泄介護体験から、下の世話は、同性がやった方が良いのか、異性がやった方が良いのか、介護する立場と介護される立場で考えてみる必要がある。」という尊厳を支えるための個別的なケアであった。また、「市地域包括支援センターを中心に認知症サポーター養成をしており、サポーターには

オレンジリングを配付し、認知症高齢者本人にはオレンジリングに白い口バを刻印し、当事者であることがわかる目印をつけて配付する取り組みが始まっている。個人番号も記載されていて、市役所や警察に事前登録することで、徘徊した場合に個人が特定できるような仕組みとなっている。しかし、ゴム性のリングに皮膚がかぶれたり、本人もリングを付けられると嫌がって脱いでおり、本人にしてみれば目立つのが嫌だと思ふ。」という認知症高齢者の尊厳に配慮したサポーターの普及であった。

(6)《安心して暮らせる地域づくり》

「老夫婦世帯で、困ったときにはすぐに民生委員に電話をかけてきて対処している老夫婦世帯がいる。一人暮らし高齢者は、自ら地域の人材やサービスとつながる努力をすることで困ったときに助けを求められる。また、助けてもらえるような相談する姿勢も必要である。」という孤独死への不安であった。

2) 生活課題への取り組みと評価

当事者性による高齢者の生活課題の41のサブカテゴリーについて、取り組みたいものに拳手をもとめ、その結果をふまえ、毎月定例のA研究会で情報の提供に取り組んだ。生活課題への取り組みから半年後、「取り組んだことは、あなたの暮らしにどのように役立っていますか？」と当事者に問い、評価を行った。

(1)「島まるごと認知症サポーター養成へのチャレンジ」の例

認知症高齢者の尊厳に配慮したサポーターの普及という生活課題について、大人だけでなく子どもや認知症高齢者の当事者も加えた島まるごとの認知症サポーター養成の取り組みについて、講師を招き情報提供した。定例のA研究会後、「地域で子ども達が認知症サポーターになれるように、家庭で小中学生の子ども達に認知症のことを話題

にした。」、「小さな島の介護の専門家でもない人々が組織をつくり、認知症サポーター養成をすることに感動したので、職場で情報提供している。」など、情報が活用されていた。

(2)「尿もれ予防の工夫」の例

足腰を鍛える運動方法の普及という生活課題について、年を取ったら仕方がないと諦めず、無理なく生活に取り入れられる尿もれ予防の方法を情報提供した。定例のA研究会後、「尿意が2時間持たず、少し我慢すると尿もれするので、効果が出るのを期待して習った予防体操をしている。」、「尿もれ予防の体操を習ったとおり実践し、尿漏れをしなくなった。」など、情報が活用されていた。

2) 考察

都市部の組織的コミュニティにおいて、高齢者から学ぶことが高齢者ケアの原点であるという立場から、導かれた当事者性による男性高齢者の生活課題は、専門性によって捉えられた課題を含み、暮らしに根ざした多様な課題であった。

当事者との協働による男性高齢者の生活課題への取り組みは、当事者の生活課題の解消のために、当事者自らが自らの老いの暮らしに役立てる取り組み(生きがい就労)であった。そのため、介護予防活動の方向性は、地域に暮らす人々の暮らしづらさに起因する困りごとに目を向けて、その生活課題を共有し一緒に取り組むことが示唆された。

今後は、当事者性による男性高齢者の生活課題の充足と当事者同士の支え合いとしての生きがい就労を連結させ、介護予防の相乗効果がえられることが課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

山口初代,大湾明美,田場由紀,砂川ゆかり,赤星成子.(2018). 看護職者による介護予防に関する国内文献の検討, 沖縄県立看護大学紀要, 19, 33-40.

〔学会発表〕(計2件)

山口初代,大湾明美,田場由紀,砂川ゆかり,
赤星成子.(2018).当事者性による高齢者の生
活課題からみた介護予防活動の方向性,日本
老年看護学会第23回学術集会(久留米市),
195.

谷田貝哲,山口初代.(2018).公共交通マッ
プをじっくり読みこなす バスマップ勉強
会とその効果について,第13回日本モビリ
ティ・マネジメント会議(JCOMM)(豊田市).

6. 研究組織

(1)研究代表者

山口 初代(YAMAGUCHI, Hatsuyo)
沖縄県立看護大学・看護学部・助教
研究者番号:70647007

(2)研究協力者

大湾 明美(OHWAN, Akemi)
田場 由紀(TABA, Yuki)
砂川 ゆかり(SUNAGAWA, Yukari)